国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

かつて石油会社の製油所にツトめていた頃、もしこの社会が、今あるかたちの資本主義社会ではなく、もっと人間が解放的に生きる社会になったら、この石油精製装置やそれにまつわる労働は、いったいどのようなものになるのだろうか、とよく考えていた。資源や環境を大事にする社会であればともと石油を使うことなどせず、したがって石油の精製などは必要ないという議論はあるかもしれないが、とにかく何らかの蒸留操作や触媒反応を含むプロセスが必要であったとしよう。その場合、少なくとも今の技術レベルにおいては、熱交換器、加熱炉、反応塔、蒸留塔、ポンプ、コンプレッサーなどで構成される装置のアウトラインは変わりようがないだろう。この種の装置の適正な規模というものも、現在とそれほど差があるとは思えない。また、このような装置は、それを運転開始したり停止したりするためには、ゆうに数日間の気を遣う作業を要するので、二四時間の連続運転を継続する以外にない。とすれば、交替勤務も夜勤の必要性も、今と大きな違いが生じるとは考えづらい。また、装置の運転に関して甘えは許されない。巨大なエネルギーをもつ可燃物が、高い温度と圧力のもとでそこら中を走りまわっている装置群である。あいまいな判断やタイムナな仕事は、いつでも重大故につながる可能性をもっている。そのことは、装置を運転する集団に関する一定の規律と統制をヨウセイする。そのような考えると、現状の社会であろうと、その矛盾を乗り越えた新しい社会であろうと、このような装置をとりまく人間たちの仕事は、現在のそれとたいして違いのあるものとは思えない。そうだとすれば、その現場においては、社会を変えていく意味はどこにあるのだろうか。

同様の論理は、鉄鋼や化学などのほかの装置産業にも成り立つと思う。今でも右のような問いに十分答えられるわけではないのだが、先のエネルギー消費に関する制約から考えて、代替社会においては、これら大工場で生産される製品の生産量は、現在より格段に少なくなり、まず大工場の数自体が大幅に減ることは間違いない。星野芳郎は、AT(オルターナティブ・テクノロジー)やエコロジストたちの社会構想を批判しつつ、今後の産業社会のあり方を論じた論考で、「大工場は技術的に、かつ政治的・経済的に必要ではあるが、それは中小工場の大海に浮かぶ島のような存在となるであろう。」と述べているが、それは正しいと思う。例えば、薄鋼板や板ガラスの製造では、これを小規模な生産単位で行おうとすると過酷な労働が要求され、大量生産のほうがエネルギー原単位も低い。I 大工場の存在意義は認めるが、大量消費経済は前提としないので、大工場の数はわずかでよいとするものである。

そのような大工場における人間の労働の問題については、私のいた製油所の経験では、オペレーターの仕事も一定のジュークレンを要するもので、それなりのやりがいのある仕事と見えたが、そ

れにも **X** は感じられた。中岡哲郎は、工業化された社会の困難は「管理するものの労働と管理されるものの労働との巨大な格差」がまねいており、その困難の解決は、「管理するものの労働の領域を大幅に多数者の手にとりもどすこと」によって、多数者の労働を豊かにし、それを多数者の「人間の条件」としてゆこうという意志と努力にかけられる他ない。」と述べ、それを相対に困難な課題としている。 **II**、環境面からの制約がよい方向に生かされて、少数の大工場が、多数の中小産業に囲まれ、社会全体として人間のコントロールが装置・機械を凌駕する状況になれば、少数の大工場においても、多数者の労働を豊かにしていける環境がととのつていくのではないだろうか。

資本主義と近代科学技術が車の両輪となって、爆発的に発展してきた近代産業社会は、その華やかさの一面、深刻な資源や環境の問題、あるいは格差と貧困の問題や労働疎外をもたらすものであった。また、人々が商品とサービスによって取り囲まれていくことにより、一見「豊か」でありながら、それらの商品やサービスに^オジュウゾクしないと生きることができず、人間が本来もっている能力の自由な展開が妨げられる社会でもあった。

そこに気候変動の問題が立ちはだかつている。気候変動問題への対処は、単に温暖化の^カカイヒという以上に、人々が納得しやすい形でこの産業社会に一定の制約を与え、社会のあり方を、GDP的に測定される「豊かさ」から、人間の能力がより自由に発揮され、多元的な欲求が^ミ充たされる豊かさに転換していく、またとない機会ではないだろうか。

二〇世紀の技術が進んできた方向は、生産の場においては、大規模化であり、省力化であり、あるいはスピードアップであった。それは自然との関係でいえば、大量に資源を消費し、環境を汚染・^キハカイし、生態系を傷つけていくものであった。また、人間の労働との関係でいえば、人間のもっていた能力が、人間にとつては外的な装置性の中に移行し、少数の管理労働と、多数の容易に置き換え可能な単純労働を生み出し、働くことの意味の喪失、仕事を通じて広がっていくべき人間関係の喪失、雇用の不安定などの問題を生み出してきたといえる。それは消費の場においては、以前の社会では人々が自らの力できり出したもの、あるいは自ら行ってきたことが、商品や商業的サービスによってすみずみまで置き換えられ、さらに次々と生み出される必要性があまりない商品・サービスに取り囲まれる流れを生み出してきた。

現在、求められているのは、エネルギー源の転換とエネルギー消費の画期的な縮小や資源の節約であり、それと同時に^ホ雇用の確保・創出であり、人間の能力と人々のつながりの回復である。

そのように考えてくると、これからの技術の進むべき方向は^ホ自ずと明らかで、それは、生産の場においては、いったんは、外部の装置に移されてしまった人間の能力を、再び人間の側に取り戻し、技術を人間がコントロールし、仕事を通じて他者とのつながりを豊かにしていけるような技術の体系である。それは、雇用を増やし、省エネルギー・省資源を進め、質の高い、^クユウズウ性・多様性・創造性のある生産力を形成していくことと^カセイゴウする。生活の場においては、や

はり低エネルギー消費・低資源消費で、人間が自ら行う領域を広げること助け、その技術によって人間関係を豊かに紡いでいけるような技術体系である。それは自然に非商品的世界の拡大ともつながる。食糧・エネルギーなどの基礎コ部分では地域の自立性が高く、しかし同時に広域的な交通・交流もさかんで、中小産業を基調としつつも、少数の大産業がそれと有機的に併存するような体系である。

^Dそれはもちろん、近代以前の技術体系に戻ることはない。先に私は、将来の世代に対して、これまで化石燃料をふんだんに消費してきた現存の世代のエゴイズムが少しでも免罪されるとすれば、それは、その再生不可能な資源を使っている間に、そのような資源がなくなるとも快適な生活ができるような、再生可能なシステムを準備できたときだけである、と書いた。同じことが、近代科学技術についてもいえる。将来の世代に対して、これまで近代科学技術の果実を「享受」してきたことが多少なりとも免罪されるとすれば、これまで蓄積されてきた膨大な科学技術の知識ほびだいと経験から、生かせるものを生かして、快適で持続可能な生産と生活のあり方をつくりあげたときだけであろう。

(田中直『適正技術と代替社会』による)

(注) 先のエネルギー消費に関する制約——筆者はこの文章に先立ち、環境面からはエネルギー消費を抑制するように求められているという現実を述べている。

A T——石油エネルギーに替わる太陽熱エネルギーなどといった、これまでの科学技術に代替する技術。

E コロジスト——自然環境保護に努める人。

G D P——経済指標の一つ。国内総生産。

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ツトめて	1
イ	タイマン	2
ウ	ヨウセイ	3
エ	ジユクレン	4
オ	ジユウゾク	5
カ	カイヒ	6
キ	ハカイ	7
ク	ユウズウ	8
ケ	セイゴウ	9
コ	タイシヤ	10

問2 傍線部a～cの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	蒸留	11
b	雇用	12
c	紡いで	13

問3 空欄Ⅰ・Ⅱに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度選ばないこと。 I 14・II 15

- ① たとえば ② しかし ③ むしろ ④ したがって ⑤ あたかも

問4 空欄Xに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 16

- ① 希望 ② 無駄 ③ 限界 ④ 向上 ⑤ 停滞

問5 傍線部A「この石油精製装置やそれにまつわる労働は、いったいどのようなものになるのだろうか」とあるが、このとき筆者はどのようなようになると考えていたか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 17

- ① 人間が能動的に活動できる社会へと変化すれば、資源の有効活用に関わる意識の高まりや自然を大切にする観点から、大規模な装置を伴う生産体制が根本から見直され、新たな労働の形が形成されることになる。
- ② 生産現場が大規模な装置を必要とするものである限り、事故防止の観点から連続運転もまた欠かせず、たとえ社会の意識が変化しても、労働者たちは自身に求められる作業の量や質が変化しないことを再認識することになる。

③ 人間を大切にする社会へと変化すれば労働者の意識も高まり、大規模な生産体制を持つ現場では仕事の量や規律の厳しさに大きな違いが生じないという実態が浮き彫りになり、労働環境の改善につながるようになる。

④ 絶対条件である技術レベルが大きく向上しない限りは、大規模な装置の構成を変えることはできないので、仕事を遂行するには適切な配慮と判断が以前と同様に求められ、過酷な労働環境が継続されることになる。

⑤ 設定される生産に伴う装置の適正な規模や運転を継続する人員の実態、安全を確保するための規律が求められることなどから、社会的な背景や意識は変わったとしても労働の形には大きな変化は生じないことになる。

問6 傍線部B「社会を変えていく意味」とあるが、ここで筆者はどのような社会をどのような社会へと「変えていく」ことに「意味」を見出しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 18

① 科学技術の発展のもとで生産の経済性が優先され、資源や環境の問題が見過ごされてきた社会から、気候変動など地球規模の環境問題に対処できる社会へと変化すること。

② 華やかな生活を送る人と貧困に苦しむ人との格差という矛盾が急激に拡大した社会から、個々の能力や欲求に応じた豊かな生活が保障される社会へと変化すること。

③ 資本主義がもたらした商品サービスのシステムに人間が取り込まれてきた社会から、人間の能力が最大限に発揮され主体的にシステムを活用する社会へと変化すること。

④ 豊かであるように見えるが実態としては人間の能力の発揮が制限されてきた社会から、人間の能力が自由に発揮され他者とのつながりも得られる社会へと変化すること。

⑤ 大規模な生産施設による無駄なエネルギー消費や環境汚染が発生した社会から、少数の大工場と多数の中小工場が連携し生活の豊かさに貢献する社会へと変化すること。

問7 傍線部C「管理するものの労働の領域を大幅に多数者の手にとりもどすこと」とあるが、具体的にはどのようにすることか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 19

- ① 人間の力が機械に移管されている現状を改善することで、機械を操作するという単純で代替可能な労働に携わる多数者とそれを管理する少数者という区分を見直すこと。
- ② 近代産業社会の発展がもたらした華やかさという恩恵と深刻な労働問題を再考し、少数に管理される労働から、本当の意味での豊かさを生み出す労働へと転換していくこと。
- ③ 生産現場における管理するものと管理されるものの社会的地位の格差をなくし、多数者の労働を単純作業から個々の能力が十分に発揮できる作業へと切り替えていくこと。
- ④ 大規模な装置を必要とする現場に関わる全ての労働者が、「人間の条件」の達成に向けた意識を立場を越えて共有し、社会全体への働きかけを継続させること。
- ⑤ 発想の転換を図り、環境面の制約を積極的に活用することで大工場と中小工場の労働の領域を適正化し、管理される多数者によるコントロールの範囲を広げていくこと。

問8 傍線部D「それ」は何を指しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 20

- ① 人間の能力と人々のつながりの回復
- ② これからの技術の進むべき方向
- ③ 他者とのつながりを豊かにする技術の体系
- ④ 人間が自ら行う領域を広げること
- ⑤ 中小産業と大産業が併存する体系

問9 傍線部E「これまで近代科学技術の果実を『享受』してきたことが多少なりとも免罪されるとすれば」とあるが、ここには筆者のどのような思いが表現されているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

21

- ① 近代科学技術がもたらした弊害を被りながらも改善に努めてこなかったことを間違いだったと反省し、将来の世代に対して自然環境と社会生活の回復を誓う強い思い。
- ② 近代科学技術が生み出す華やかで豊かな一面を深く考えずに受け入れてきたことに気づき、将来の世代に向けてその豊かさを持続させようと積極的に考える真剣な思い。
- ③ 近代科学技術が持つ正と負の両面を受け入れざるを得なかった社会のあり方を見つめ直し、将来の世代に対して負の面を残さないようにしたいと考える真摯な思い。
- ④ 近代科学技術が大きな影響を与えた現存の世代のエゴイズムと経済活動における罪の部分を重くとらえ、将来の世代に対してそれを償いたいと深く苦悩する思い。
- ⑤ 近代科学技術がもたらす恩恵に長く浴するばかりであつたことを大きな過ちと認め、将来の世代に対して少しでも責任を果たさなければならぬと考える謙虚な思い。

問10 筆者の考えについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

- ① 大工場を必要とするような装置産業においては、社会の仕組みが変わっても労働の質や量は大きく変わることがないので、現場の労働格差の問題が持ち越されることになる。
- ② 環境に配慮してエネルギー消費を抑えるために、装置産業の大工場の数を最小限にしようとするのは正しい考え方であるが、現実的には大きな困難が生じると予想される。
- ③ 環境面からの制約や気候変動の問題は克服することが難しい大きな課題ではあるが、対応の仕方によっては労働や社会の豊かさにつながることをできるものと考えられる。
- ④ 近代産業社会は資本主義と科学技術に支えられているため、資源や労働に関わる問題も経済効率や生産性の観点から検討され、個人よりも社会の豊かさが優先されてきた。
- ⑤ エネルギーの確保に向けた新たな技術開発が求められているが、それを達成できれば非商品的世界が拡大し、社会は本当の意味での豊かな人間関係で構築されたものとなる。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

作者の女性はある身分の高い男性と恋仲になるが、次第に疎遠になり、とうとう作者は尼寺で出家をした。その後、愛宕（現在の京都市東山区の辺りか）の近くに移ることになった。

そのころ心地例ならぬことありて、命もあやふきほどなるを、^(注)ここながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ、思ひかけぬ便りにて、愛宕の近き所にて、はかなき宿り求め出でて、移ろひなんとす。かくとだに聞こえさせまほしけれど、問はず語りもあやしくて、泣く泣く門を引き出づる折しも、先に立ちたる車あり。前はなやかに追ひて、御前などごとしく見ゆるを、誰ばかりにかと目とどめたりければ、^(注)かの人知れずうらみ聞こゆる人なりけり。顔しるき隨身など、まがふべうもあらねば、かくとは思し寄らざらめど、⁽ⁱ⁾そぞろに車の中恥づかしくはしたなき心地しながら、今ひとたびそれとばかりも見送り聞こゆるは、⁽ⁱⁱ⁾いとうれしくもあはれにも、さまざま胸静かならず。つひにこなたかなたへ行き別れ給ふほど、^Bい^Cといたう顧みがちに心細し。^(注)かの所に行き着きたれば、かねて聞きつるよりも、あやしくはかなげなる所のさまなれば、いかにして耐へしのぶべくもあらず。暮れはつる空の気色も、日ごろに越えて心細く悲し。宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符の菅菰に、ただ一人うち臥したれど、とけてしも寝られず。

はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうたたねの夢

日ごろ経れど、訪ひ来る人もなく心細きままに、経つと手に持ちたるばかりぞ、頼もしき友なりける。^(注)「世皆不牢固」とある所を、強ひて思ひ続けてぞ、憂き世の夢も自ら思ひ醒ますたよりなりける。

今日か明日かと心細き命ながら、卯月にもなりぬ。十六夜の光待ち出でて、程なき窓の蔀だつものも下ろさず、つくづくと眺め出でたるに、はかなげなる垣根の草に、まどかなる月影に、所からあはれ少なからず。

置く露の命待つ間の仮の庵に心細くも宿る月影

いづくにかあらん、かすかに笛の音の聞こえ来る、かの御あたりなりし音にまがひたる心地するにも、きと胸塞がる心地するを、^E

待ち慣れし故郷をだに訪はざりし人はここまで思ひやは寄る

さてもなほ、憂きに堪へたる命の限りありければ、やうやう心地もおこたりさまになりたるを、^(注)かくてしもやとて、また故郷に立ち帰るにも、松ならぬ木末だに、⁽ⁱⁱⁱ⁾そぞろに恥づかしく見廻され

消えかへりまた生くべしと思ひきや露の命の庭の浅茅生

歎きながらはかなく過ぎて、秋にもなりぬ。長き思ひの夜もすがら、止むともなき砧の音、寝

屋近ききりぎりすの声の乱れも、一方ならぬ寢覚の催しなれば、壁に背ける灯火の影ばかりを友として、明るるを待つもしづ心なく、尽きせぬ涙の雫は、窓打つ雨よりもなり。

(『うたたね』による)

(注)

ここながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ——ここで死んでしまったら寺に迷惑を掛けるので。

前はなやかに追ひて、御前など——「前」と「御前」は貴人の通行に際し、先導して人払いをすること。

かの人知れずうらみ聞こゆる人——作者と恋仲であった男性のこと。

それとばかりも——あの方だと知るだけで(会話もできず)。

かの所に行き着きたれば——「かの所」は愛宕あたりの仮住まいのこと。

敷きも定めぬ十符の菅菰——うまく敷けない粗末な敷物。

世皆不牢固——『法華経』にある文言。すべての存在のはかなさをいう。

かの御あたりなりし音——恋人の邸宅のあたりで聞いた音。

かくてしもや——こうしていてもいけない。

問1 傍線部ア～エの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

ア	隨身	23
イ	卯月	24
ウ	十六夜	25
エ	藪	26

問2 波線部あゝおの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 便り

27

- ① 偶然
- ② 手紙
- ③ 都合
- ④ うそ
- ⑤ つて

い そぞろに

28

- ① すぐに
- ② わけもなく
- ③ 次第に
- ④ かえって
- ⑤ こっそり

う あやしく

29

- ① 粗末で
- ② 不思議に
- ③ 非常に
- ④ 華やかで
- ⑤ 意外に

え 心細きままに

30

- ① 心配がある上に
- ② 落ち着くにつれて
- ③ 寂しいので
- ④ しんみりするけれど
- ⑤ 不安になるとすぐに

お おこたりさま

31

- ① 茫然
- ② 悪化
- ③ 怒り
- ④ 快方
- ⑤ 焦り

問3 二重傍線部 a「に」の文法的意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

32

- ① 格助詞
- ② 接続助詞
- ③ 完了の助動詞
- ④ 断定の助動詞
- ⑤ 副詞の一部

問4 二重傍線部 b「の」と同じ意味用法で用いられているものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

33

- ① うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山（新古今和歌集）
- ② 吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし（古今和歌集）
- ③ さくら花散りぬる風のなごりには水なき空に波ぞ立ちける（古今和歌集）
- ④ 逢ふまでとせめて命の惜しければ恋こそ人のいのりなりけれ（後拾遺和歌集）
- ⑤ 寂しさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮（新古今和歌集）

問5 二重傍線部 (i)～(iii)の動作の主体として最も適当なものを、次の①～③のうちからそれぞれ一つずつ選べ。同じものを二度以上用いてもよい。

(i) 思し寄らざらめ

34

(ii) 見送り聞こゆる

35

(iii) 立ち帰る

36

- ① かの人知れずうらみ聞こゆる人
- ② 宵居すべき友
- ③ 作者

問6 傍線部A・Cの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。

- A かくとだに聞こえさせまほしけれど 37
- ① 病気になって命が危険であることでさえ、あの人は聞こうとしてくれないけれど
 - ② 具合が悪くなつてすみかを変えたということだけでも、あの人にお伝えしたいけれど
 - ③ 一人で暮らしていることを心配しているとだけでも、あの人の口から聞きたいけれど
 - ④ 頼りない家に引越したので、手紙を書いてくれることだけでも望んでいるけれど
 - ⑤ 気分が悪いために療養生活を送っていることをさえ、お聞かせできないけれど

C いかにして耐へしのぶべくもあらず 38

- ① どうして我慢できないだろうか、いやできる
- ② どのように我慢すればよいだろうか
- ③ どのようにしても我慢しなくてはならない
- ④ どのように我慢したらよいかわからない
- ⑤ どのようにしても我慢することができない

問7 傍線部B「いといたう顧みがちに心細し」とあるが、このときの作者の様子の説明として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 39

- ① 遠目にでも恋人を見ることができた嬉し^{うれ}さがある一方、穏やかではいられない複雑な気持ちもあり、何事もなく行き違うことを心残りに感じている。
- ② 少しだけでも恋人と会話をすることができた嬉し^{うれ}さがある一方、恨み言を言いたくなる感情も抑えきれず、このまま通り過ぎることを悔しく感じている。
- ③ 一瞬でも恋人を見ることができた嬉し^{うれ}さがある一方、これまでのつらい気持ちが蘇^{よみがえ}ってきて、恋人を呼び止めて気持ち確かめようか迷いを感じている。
- ④ うまく隠れて恋人に気づかれなかった嬉し^{うれ}さがある一方、恋人の冷たい態度への不満が高まつてきて、このままやり過ぎすこと^{こと}にためらいを感じている。
- ⑤ 恋人が自分に気づいてくれたことに嬉し^{うれ}さがある一方、愛憎入り交じった様々な感情も生じてきて、このまま会えなくなることを寂しく感じている。

問8 傍線部D「頼もしき友」と作者が述べるのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 40

- ① 落ち着いた生活を取り戻しつつある中で、経を唱えているときは恋人への未練を完全に断ち切ることができるから。
- ② 誰も仮住まいを訪れる人がいない中で、経を唱えているときは仏道修行のつらさを紛らわすことができるから。
- ③ 恋人からは手紙だけが届く中で、経を唱えているときはかなわぬ恋に執着する愚かさを省みることができるから。
- ④ 恋人が来るのを期待して待ち続ける中で、経を唱えているときは他人から仏道修行をしていると思われるから。
- ⑤ 待っていても誰も来ない日々を過ごす中で、経を唱えているときは恋人やつらい世のこのことを忘れられるから。

問9 傍線部E「きと胸塞がる心地する」とあるが、このときの作者の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 41

- ① 恋人が奏でる笛の音が遠くから聞こえてきたので、忘れようとしていた恋人のことを思い出して仮住まいでの暮らしがつらくなり気分が落ち込んでいる。
- ② 恋人の笛の音と似ている音を聞いていると、私がわびしい仮住まいで苦しんでいることを恋人が知るわけがないと諦めて投げやりな気分になっている。
- ③ 笛の音を聞いて昔の恋人のことをふと思いついたが、自宅にさえ訪ねてこない恋人がこのような仮住まいを訪ねてくるはずがないと気分が沈んでいる。
- ④ 恋人の形見である笛を吹いて昔を懐かしんでいると、疎遠になった現在でさえ恋人への一途な思いを貫いていることに誇らしさを感じている。
- ⑤ 仮住まいを恋人が訪れるはずがないと割り切っていたが、笛の音を聞いて恋人がこちらに近づいてきたことに気づいて気持ちが高ぶっている。

問10

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

42

- ① 作者は顔見知りの隨身を見つけるまで、通行する貴族が昔の恋人だとわからなかった。
- ② 作者は恋人から声を掛けられたが、恥ずかしさのあまり車から出られなかった。
- ③ 仮住まいは耐えられないほど貧相だったので、作者は一刻も早く帰りたいと仏に祈った。
- ④ 作者は仮住まいでぼんやりと物思いにふけりながら、恋人を月に喩^{たと}えた歌を詠んだ。
- ⑤ 自宅に戻った作者は、秋の夜長に独り寝の嘆きを募らせて、涙を流す日々を送った。